

第7章 宗教と社会



人々はソ連時代を語るとき、その時代の複雑さを反映する現象として宗教をめぐるさまざまな事例を挙げる。宗教をめぐる諸問題は当時の国家政策、ソ連時代以前（宗教中心）と以降（非宗教・共産主義）の異なった教育制度、そして彼らの生活水準や生活スタイルと深く結びついていた。

1. 政権の対宗教政策と人々の対応

1.1 1917年革命以降のイスラーム

ソ連形成以前から現代のウズベキスタンを含む中央アジア領域においてイスラームはもっとも重要な要素だった。この時期、人々にとってイスラームは自己認識の単位であり、人間関係において中心的な役割を果たしていた。帝政ロシアに革命が起きてから共産主義社会建設が始まり、イスラームの社会的な役割は否定されたにもかかわらず、イスラームは長い間、人々の生活において重要性を保ち続けた¹⁾。その状態は当時の宗教をめぐる政治的・社会的な状況の複雑さを物語っていた。

一方で、ソビエト政権はイスラームの強大な影響力と大勢の人がイスラームの教えに沿って生活を送っていることを理解していた。同時に、イスラーム教は宗教関係者による民衆の搾取の道具にすぎず、宗教指導者の影響力を維持さ

1) タシケントの事例を通して、帝政ロシアからソ連初期にかけての政策と生活の変容を描いたものとしては、Jeff Shaden, *Russian Colonial Society in Tashkent: 1865-1923*, Bloomington: Indiana University Press, 2007 参照。また帝政ロシアのイスラーム教に対する政策については、S.N. Abashin, D. Yu. Arapov, N.E. Bekmakhanova, O.V. Boronin, O.I. Brusina, A. Yu. Bykov, D.V. Vasil'ev, A. Sh. Kadyrbaev, T.V. Kotyukova, P.P. Litvinov, N.B. Narbaev, Zh.S. Syzdykova, *Tsentrāl'naiia Aziia v sostave Rossijskoi Imperii*, Moskva: Novoe literaturnoe obozrenie, 2008. 特に 234-258 頁参照。

せるものとみなしていた。それに加えて、ソビエト政権は、人々が信仰によって自分たちの日常の問題を解決する方法を見つけようとしているのは、彼らが無知であるためとみなしていた。ソビエト政権の指導者は「宗教は国民にとって麻薬である」とその悪影響とそれがもたらす「誤解」を強調した²⁾。

それに対し、一般国民はこれまでのように宗教の教えに従いながら生活を送ろうとしていた。彼らはソビエト政権が唱える共産主義とイスラームの間に特に大きな矛盾を感じてはいなかった³⁾。以下の証言のように、ソビエト政権のもとで仕事をしながら、宗教的な儀礼を守り続けていた。

祖父は当時のコルホーズ（集団農園）事務所で警備員をしていた。夜中にコルホーズ内の事務所に泊まり込み、朝になると家に帰るシフト制だった。彼は、（1日5回、家でも）仕事場でもお祈りをするようにしていた。お祈りの場所として事務所の前に建てられた大理石のレーニン像の下を選んだ。その理由は、像の下がいつも清潔でキラキラと光っていたからだそう
で、毎朝お祈りを欠かさなかった。

ある日、コルホーズの農園長とコルホーズの共産党組織長が早めに出勤すると、事務所の窓から祖父がレーニンに向かってお祈りをしているところを目撃した。2人は走ってきて、大声で「お前は何をしているんだ！なぜレーニンの足元でお祈りしているんだ」と叫び、「レーニンは無宗教者で、無神論国家を創った偉大なる人物だ。ここはお祈りするような場所じゃない」と祖父を追い払おうとした。

そこで祖父は「お祈りとは一番清潔で綺麗な場所です。私たちの事務所周辺ではここしかありません！」と、レーニン像の足元を指し

2) 反宗教キャンペーンについては、Shosana Keller. *To Moscow, Not Mecca: The Soviet Campaign against Islam in Central Asia, 1917-1941*. London: Praeger, 2001 参照。

3) 日常におけるイスラームに関してはいくつかの著書が発表されている。例えば、Sean R. Roberts. "Everyday Negotiations of Islam in Central Asia: Practicing Religion in Uyghur Neighborhood of Zarya Vosotoka in Almaty, Kazakhstan", in Jeff Shadeo and Russel Zanca, eds., *Everyday Life in Central Asia: Past and Present*, Bloomington: Indiana University Press, 2007. 339-354 頁参照。ウズベキスタンに関しては、Eric M. McGlinchey. "Divided Faith: Trapped between State and Islam in Uzbekistan", in Jeff Shadeo and Russel Zanca, eds., *Everyday Life in Central Asia: Past and Present*, Bloomington: Indiana University Press, 2007. 355-370 頁参照。

た。そうするとコルホーズ長と共産党組織長は返答に困り、祖父に二度とそのような行為をしないように注意しただけで許したらしい。これも当時の矛盾だらけの社会の様相だといえるだろう。(証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

ソビエト政権は宗教を一気に禁じることは技術的に不可能であったことや人々の不満と政権に対する反感を生む恐れがあるとして、イスラームの社会における役割を一時的に認めざるを得なかった⁴⁾。そして、政権は宗教指導者や関係者がソビエト政権寄りの考え方を広めるように働きかけた⁵⁾。一部の宗教関係者や宗教教育機関の活動も認めていた⁶⁾。政権の狙いは貧しい人々の味方であるとアピールすることにあった。

1917年に革命が起きた時、私の祖父はカーディー（イスラーム法の裁判官）として働いていた。祖父は23年間にわたってカーディーの仕事をしていた。

革命後、新政権になっても祖父は過去の公正な仕事ぶりから評価され、特に厳しい処遇は受けなかった。もし彼が不正を行うような人であれば（政権も）人々も許さなかったと思う。もう一つの理由に、高い権威をもちながら、裕福ではなかったこともあったと思う。その後も祖父はイマーム（モスクの指導者）として1928年に病気で亡くなるまで長年務めた。(証言者No. 42, ウズベク人, 男性, コーカンド)

ソビエト政権寄りと思われる宗教指導者とは妥協の機会を探っていた時もあったが、原則として彼らに対して政権は慎重であった。宗教関係者やその家族、

4) そのような技術的な問題の一つは、ソビエト司法制度の導入にともない、裁判官などが一気にイスラーム法の規定をまったく使わないようにすることは不可能だったことである。その詳細については、Shosana Keller, *To Moscow, Not Mecca: The Soviet Campaign against Islam in Central Asia, 1917-1941*, London: Praeger, 2001, 80-81頁参照。

5) ソビエト政権の宗教政策については、Shosana Keller, *To Moscow, Not Mecca: The Soviet Campaign against Islam in Central Asia, 1917-1941*, London: Praeger, 2001参照。

6) 詳細については、Shosana Keller, *To Moscow, Not Mecca: The Soviet Campaign against Islam in Central Asia, 1917-1941*, London: Praeger, 2001, 93-96頁参照。

親戚は普通の生活を送ることが許されても彼らのキャリアや境遇はそれほどよくなかった。以下のように、弾圧を受けなかったとしても、ソビエト政権からは妥当な評価もしてもらえなかったようだ。

当時は教育を受けていない「ヤロンギオヨク（直訳は「裸足」、貧しく無学な人々のこと）」が、貧しい労働者や農家を支援するソ連の共産主義のイデオロギーのせいで突然権力者になっていった。例えば、H氏という人は、貧乏だったことで指導者（nachal'nik）に昇進し、村の警察長になって農業関係の責任ある仕事に就いた。

しかし、私の父は教育を受けて努力をしていますが、カーディーの息子であることだけで政権に対する忠誠心を疑われた。それで指導的な立場に就くことはできなかった。（証言者No. 42, ウズベク人, 男性, コーカンド）

ソビエト政権と対立関係にあったカーディーはもっとも厳しい処遇を受け、その影響は彼らのみならずその家族にも及んでいた。ある人の父親はカーディーの息子であったことで以下のような扱いを受けたという。

父は1925年からホテルに勤めた。政権は父に対して弾圧はしなかったけれど、ソビエト政権に抵抗していたカーディーの息子だったためにいつも見張り役が付いていたようだ。（証言者No. 8, ウズベク人, 男性, タシケント）

このように普通の生活を送ることを許されながら政権による監視が厳しかったのは、反政府活動を疑われつつも、まだ完全にその容疑をかけられていない人々の例だ。彼らが容疑をかけられると、その運命はもっと過酷なものになっていった⁷⁾。

宗教関係者の中で特に裕福な人々の多くは更生できないものとしてシベリア

7) その方法と数字については、Shosana Keller, *To Moscow, Not Mecca : The Soviet Campaign Against Islam in Central Asia, 1917-1941*, London : Praeger, 2001, 205頁参照。

に送られた。彼らの扱いは第2章で述べた脱クラーク化された人々と変わらず、彼らも国と国民の敵という容疑で強制移送されてしまった。彼らの財産は政府に押収され、それは貧しい人々のために使われた⁸⁾。例えば、押収した家に生活に困っていた人々を住ませ、ソビエト政権は国民の中でも労働者や農民に対する支援を強調した。以下の証言はその一例である。

私は子どもだったが、新しい地に移動したことを覚えている。そこに着いた時に私たちは（新政権の代表者に処罰されて）シベリアに送り出され、空き家になっていた裕福な宗教関係者の家に住まわされた。

周辺には自然もあって美しく、その家はすごく住みやすかった。家の横には昔その家に住んでいた人の冬用の家もあった。夏には夏用の家に住み、冬には冬用の家に住んでいた。

たまに村へコンサートのために歌手が訪れると、舞台には貧しい人の家が使われ、彼らが泊まる場所として私たちの住んでいた夏用の家が使われていた。（証言者No. 16, ウズベク人, 女性, タシケント）

ソビエト政権は、宗教関係者の裕福な生活を彼らによる民衆の搾取の証とみていたが、宗教指導者を排除するには他の要因もあった⁹⁾。

例えば、女性の社会進出や社会的立場がその一例である¹⁰⁾。これに関しては、政権と宗教指導者や彼らを支持する保守的な人々が対立した。当時は女性の行動のみならず、服装などもイスラームの教えに背くとして厳しく制限されていた。それに対し、ソビエト政権（特に非ムスリムの指導者）はフジウム（女性

8) 1930年代後半までに弾圧にあった人の名簿とライフヒストリーに関しては、Naim Karimov, *Tarikhning hasratli sahifalari*, Toshkent : Sharq, 2006がある。

9) 1920年代からソビエト政権は反宗教キャンペーンを開始している。その詳細については、Shosana Keller, *To Moscow, Not Mecca : The Soviet Campaign Against Islam in Central Asia, 1917-1941*, London : Praeger, 2001, 64-65頁参照。

10) このキャンペーンのポジティブな影響に関して多くの研究者の意見は一致しており、ソ連崩壊後とウズベキスタンの独立後において内外に多くの著書が発表されている。例えば、Marianne Kamp, *The New Woman in Uzbekistan : Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*, Seattle : University of Washington Press, 2006参照。このキャンペーンがウズベキスタン女性たちの人生をどのように変えたのかについては、Marfua Tokhtakhodzhaeva, *Otmish toliqtirgan ayollar : Ozbekiston jhamiyatning Islomga qaitishi va hotinqlar ahvoli*, Toshkent, 2002参照。

解放運動、原義は「攻撃」) というキャンペーンを始め、その一環として女性の就職、教育を可能にすることや男性が同行しなくても外出できるようにしようとした¹¹⁾。その象徴的なものは、当時女性が被ることが義務付けられていたブルカを自発的に脱ぎ捨てる呼びかけであった¹²⁾。しかし、それは困難を極めた。証言者の一人は、その状況を以下のように説明している。

両親が結婚した時、母はパランジャ（ブルカ）を被っていたが、（フジムの影響もあり）パランジャを脱ぐ決心をした。その時、両親の祖父たちが激怒して、父と母を殺すとまで言ったそうだ。

実際に、当時パランジャを脱いだことで家族の手で殺された人も何人かいた。社会の風潮はパランジャを脱ぎ捨てる行為を認めていなかった。そうしたこともあり、父たちは家の人から殺すと言われるとすぐに家を出た。その場では、2人は逃げ切ったが、結局、母は（彼女の両親により）強制的に実家に連れ戻されてしまった。

父は1人でタシケントへ行き、学校の先生になるために勉強して、その後コムソモールの仕事に就いた。しかし、祖父のことを宗教関係者でフジムに反対しているとコムソモールに手紙で密告された。父の上司だと思いが、その人が心配して手紙のことを教えてくれて、早くタシケントを離れるように忠告したという。

それで父がアンディジャンに戻ると、幸いにも彼が相談した相手（共産党員）が家族をアンディジャンに連れてくるよう言って、そこの共産党執行委員会で仕事ができるよう取り計らってくれた。父は母の実家に贈り物を買って行き、それまでにも彼女の母親に様々な品物を送るなどして機嫌をと

11) このキャンペーンの影響は大きく、女性解放運動の重要性を強調する人は多い。具体的なライフヒストリーを使い、女性解放運動の重要性を解説するものとしては、Marfua Tokhtakhodzhaeva, Dono Abdurazzakova, Almaz Kadyrova 編, *Sudby i vremya: Shtrikhi k proshlomu Uzbekistana v ustnykh rasskazakh zhenshin-svidetelei i sovremennits sobytij*, Moskva : Institut Otkrytoe Obschestvo Fond Sodejstviiia, 2003 参照。

12) ブルカの着用を批判したのはソビエト政権だけでなく、それ以前から帝政ロシア時代からブルカの着用を疑問視した人もいた。そのきっかけは様々であり、これらについて詳しくは、Marianne Kamp, *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*, Seattle : University of Washington Press, 2006, 123-148 頁参照。

り、母を自分のもとに戻すことを許され、新しい場所で暮らし始めた。(証言者No. 27, ウズベク人, 女性, ナマンガン)

このようにフジムのキャンペーンは政権と宗教の対立として始まったが、事実上各家族内、親族間の関係悪化につながるが多かった¹³⁾。このキャンペーンはウズベキスタンの保守的な人々と現代化を求めている人々、古い社会の秩序を守ろうとする人と新しい秩序を支持する人、宗教関係者と政権関係者など様々な人の間に亀裂を生む結果となった¹⁴⁾。

1.2 宗教と共産党

これまでも述べたように、共産党と宗教機関とは複雑な関係にあった。共産党は宗教機関を信頼しておらず、そこに通う人は後ろ向きで保守的な考え方の持ち主として批判していた¹⁵⁾。それでも、人々の宗教心は非常に強く、多くの人はソ連時代を通して日常的に宗教施設に通うようにしていた。

それに対し、共産党の方針によって多数のモスク・教会が壊され、活動を禁止された。活動の継続が認められた一部のモスク・教会では、構成員は共産党の監視下に置かれ、以下のように、その監視活動を共産党員に任せ、秘密警察や共産党に報告させた¹⁶⁾。それは共産党内でも議論の分かれるところとなり、一般の共産党員や共産党への入党を考える若者と幹部の間に温度差を生んだようだ。

13) ソビエト政権の反イスラーム教キャンペーンに対し、ウズベク人でイスラーム教の人が対応に窮したことに關しては、Douglas Northrop, "Languages of Loyalty: Gender, Politics, and Party Supervision in Uzbekistan, 1927-41", *Russian Review*, Vol. 59, No. 2 (Apr., 2000), 179-200頁。特に183頁参照。

14) フジムのキャンペーンが生んだ亀裂などについては、Douglas Northrop, "The Limits of Liberation: Gender, Revolution and the Veil in Everyday Life in Soviet Uzbekistan", in Jeff Shadoo and Russel Zanca, eds., *Everyday Life in Central Asia: Past and Present*, Bloomington: Indiana University Press, 2007, 89-102頁参照。

15) ソビエト政権と宗教指導者の日常生活に関する意見の違いと対立を1930年代の結婚式の事例を通して描いた論文としては、Marianne Kamp, "The Wedding Feast: Living the New Uzbek Life in the 1930s", in Jeff Shadoo and Russel Zanca, eds., *Everyday Life in Central Asia: Past and Present*, Bloomington: Indiana University Press, 2007, 103-114頁参照。

16) 共産党とコミュニティ内のモスクに関しては、ティムール・ダダバエフ『マハラの実像—中央アジア社会の伝統と変容』、東京大学出版会、2006年、57-74頁参照。

私の祖母は非常に信心深い人間だった。父は共産党員であり、もちろん宗教を信じない人だった。私はピオネール（中学校共産少年組織）やコムソモールを経験したけれど、共産党に入党を勧められた時はまだ共産党員になる資格はないと答えて拒否した。当時、一般の共産党員が多くの仕事をしなければならぬことに対し、指導者は何もしないでただ（状況を）観察しているだけだった。私はそれが不平等だと思い（共産党員になることは）いやだった。

例えば、宗教施設に通う人の監視だと、教会の前に共産党員が当番で待ち構え、誰が教会に来ているのかを監視し、共産党やしかるべき機関（秘密警察など）に報告していた。共産党執行部は一般の人に処罰を与えることはしなかったけれど、共産党員、共産党・政府の指導的な立場にあった人やその親戚が教会やモスクに行くとき厳しく処分した。（証言者 No. 30, ロシア人, 男性, アンディジャン）

宗教に対する意見はモスクワのソ連共産党本部とウズベキスタンの共産党員の間でも違っていた。ソ連共産党の幹部は宗教を第三者の観点からみており、宗教の社会的な地位の評価は低かった¹⁷⁾。これに対して、ウズベキスタンの共産党員や共産党幹部にとって宗教（特にイスラーム）は昔からの価値観を構成するものであり、彼らにとって宗教離れは非常に難しい選択肢だった¹⁸⁾。彼らは宗教の教えを守ろうとする気持ちと共産党の方針に従おうとする責任感の狭間で、妥協策を見つけようとしていた。

宗教的な行事が禁止されていたため、人々は自分たちの知人の行事だけでなく自分の両親の行事にも参加しなかったことがある。当時、ウズベキスタン共産党の書記だったラノ・アブドラエワは、イスラーム教徒の父親の葬式に行かなかったことで知られている。（証言者 No. 9, ウズベク人, 男性,

17) それはイデオロギーに沿ったものであった。

18) 共産党員がKGBと協力し合い、様々な情報を集めさせられ、多くの人がKGBの教育施設に行かされた。その仕組みについては、N.V.Petrov, "Svoi lyudi v organakh Gosudarestvennoi Bezopasnosti", T.S.Kondrat'eva, A.K.Sokolova, *Rezhimnye lyudi v SSSR*, Moskva : Rossiiskaia Politicheskaiia Entsiklopediia, 303-325 頁参照。

タシケント)

モスクなどの宗教施設はソビエト政権によって壊されるか、本来の目的以外で使用された¹⁹⁾。多くの証言者は、モスクは宗教関係者によって使用されておらず、その地域にあった政府機関の必要性を満たすために使われていたと記憶している²⁰⁾。ある人は「モスクを倉庫や牛などを飼うための場所として使っていた」という。似たような証言が他の地域の在住者からも得られた²¹⁾。

子どもの頃から村のモスクの周辺でよく遊んでいた。ある時からモスクの屋根裏部屋では色々な人が出入りし始め、その神聖な場所で何か作るために火を用いることもあった。部屋は綿花の保存場所（倉庫）として使われていた。

私は大人になってからあちこちの地域を回ってみたけれど、私たちの村の例はまだましな方だった。モスクを牛舎代わりにしている地域もあった。（証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント）

共産党員の間でも宗教に対する姿勢に温度差がみられた。同時に、共産党員と一般国民の間にも宗教の見方や関連行事への参加のしかたは異なっていた²²⁾。共産党員になった人は共産党の規定により、宗教関連の行事を開催することや

19) 例えば、1917年に、中央アジアに20,000モスクがあったのに対し、1929年までには4,000以下のモスクしか機能しておらず、さらに1935年までに中央アジアのムスリムがもっとも多く在住していたウズベキスタンでは、公式に機能していたモスクはわずか60しかなかった。データの詳細については、Paul Froese, "After Atheism: An Analysis of Religious Monopolies in the Post-Communist World", *Sociology of Religion*, Vol. 65, No. 1 (Spring, 2004), 57-75頁。特に63頁参照。

20) そのような政府のモスクに対する姿勢は、多くの刊行物などに掲載された。例えば、*Sotsialisticheskie obriady v zhizni*, Tashkent: Uzbekistan, 1987参照。

21) ソ連時代の著書はモスクを活用し、その建物を宗教と異なる目的で使用することを指導していた。多くのモスクが閉められ、教育機関などに替えられたが、現地の人からは反発も多かった。例えば、ウズベク人作家ハムザはあるモスクを博物館に変えようとしたが、現地の人々によって殺されてしまった。その詳細は、Adeed Khalid, *Islam after Communism: Religion and Politics in Central Asia*, Berkeley: University of California Press, 2007, 80頁参照。モスクの建物を別の目的で使うように指導するガイドラインの一例は、*Sotsialisticheskie obriady v zhizni*, Tashkent: Uzbekistan, 1987参照。

22) その具体例に関しては、ティムール・ダダバエフ『社会主義後のウズベキスタン—変わる国と揺れる人々の心（アジアを見る眼110）』、アジア経済研究所、2008年、51-58頁参照。

それに参加することはできなかったが、一般国民は日常生活の中でそうした行事をきちんと行い、それを各地域もしくは民族の伝統行事に見せかけながら守っていた。

国民のレベルでは共産党による厳しいコントロールがあったにもかかわらず、人々は宗教行事に参加していた。私の祖父は110歳で亡くなったが、亡くなる直前まで毎日5回お祈りをしていた。(証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

このようにウズベキスタン出身者は日常生活では宗教儀礼を守っていた。ソ連軍に徴兵された時の宗教を巡る興味深い話がある。若者がソ連軍の兵役に行くとアンケートを配布され、その中で彼らの宗教観について聞かれたようだ。

宗教に関して、当時は非常に厳しいコントロールがあった。例えば私は兵役に呼ばれた時、軍の政治局から神を信じるかどうかについてのアンケートのようなものを書かされた。アンケート作成者が期待した通りに、私は神を信じないと答えておいたけれど、心の中でやはり神を信じていた。(証言者No. 35, ウズベク人, 男性, タシケント)

同時に、兵役を経験した人の中には配属先でのムスリムの宗教観に対する配慮のなさから逃げて家に帰ってきた人もいたようだ。

近所の子の息子はソビエト政権時代、兵役に呼ばれウクライナに送られた。しかし、数週間後に彼は逃げ帰ってきた。彼の話によると、食事に豚肉が出され、食べなかったら上官から厳しく叱られたり、兵隊同士からいじめられたりしたらしい。その後、彼は無理矢理配属先に戻そうとした行政に反発して、自分の体に火を付けて自殺した。(証言者No. 49, タジク人, 女性, プハラ市)

2. ソビエト社会における宗教の役割

革命後も宗教は重要な役割を担っていたものの、ソ連時代の中で形や姿を変えていった。そのきっかけとなった要因はいくつかあるが、これまでに述べた革命後の政治環境、共産党やソ連政府の宗教政策と教育が大きく影響している。それがしだいに宗教に対する世代間の違いを生み、愛着心を維持し続ける人と宗教を否定する人とに分けてしまった。宗教の社会的な地位を完全に否定する人は共産党の幹部や政府の役人の中に特に多かった²³⁾。

しかし、ウズベキスタン国民の中では宗教を完全に否定する人は少なく、その教えを決まり通りに実践した人と、宗教を信じながらも日常生活においては宗教儀礼をそれほど重視しない人に分かれていた。

2.1 宗教に対する世代間・民族間の温度差

ソ連時代を通して、宗教に対する姿勢は世代間で分かれていた。ソ連時代に宗教を研究していた人の中でも、ウズベキスタンを含む中央アジアの国民の間では年を取るほど、宗教心が強くなる傾向がみられたことを強調する研究者もいた。その傾向はソ連時代のみならず、ソ連崩壊後にもみられる。ある証言によると、年を取るほど、人間は死について考え始め、その後のことについて考えるようになり、宗教に関心を持ち始めるという。

今（の時代）になって私は宗教にことのほか関心を持ち始め、お祈りをするようになった。それは上（政府）からの圧力がなくなり、宗教に対する考え方を自由に決められるようになったからである。もう一つは、年々、年を取るにつれて、やはりこの世を去ってからのことを考えるようになったからでもある。（証言者No. 4, ウズベク人, 男性, タシケント）

23) その政策に関しては、Shosana Keller, *To Moscow, Not Mecca: The Soviet Campaign Against Islam in Central Asia, 1917-1941*. London: Praeger, 2001. 105-139頁参照。

このような考え方はウズベキスタン国民の間ではごく一般的である。ソ連時代に宗教を信じていてもモスクに通うことが許されなかったため、家の中で1日5回お祈りをしながら教えを守っていたお年寄りが多かった。

彼らは自分たちの子どもや孫にその知識を伝えようとしていたが、革命以降に生まれソ連の無神論教育を受けた世代の宗教に対する愛着は薄れていた。その典型的な例が以下の証言からも読み取れる。

祖父はコーランを読めて、アラビア語ができる人だった。毎日5回はお祈りをしていたけれど、自分の子どもたちにそれを強制してはいなかった。それはある時期が来た時に、それぞれが認識するものだと考えていたからだそう。彼は105歳まで生き、生前は多くの人がうちに来てアドバイスを求めていたという。

父は根っからの共産党員で、私たち息子も共産党員として育てられた。父は農業関係の仕事をし、綿花生産を指導していた。母は大学で数学の教官をしていた。父の教育のおかげもあり、兄弟全員が大学院に進み各分野でカンディダート（準博士）の学位を手に入れた。そして学問の分野において活躍する道も開けた。（証言者No. 15, ウズベク人, 女性, タシケント）

このようにソビエト教育を受けた人にとっては、宗教は二の次のものとなり、社会は新しい価値観に基づいて構築され始めた。その価値観の基本は共産党のイデオロギーと教育であり、宗教の教えを通してではなく学問の様々な領域の勉強を通して自分たちの社会の意味を理解しようとする人が増えた。彼らの多くは昔のようにモスクに通うことがなくなった。そのためソ連時代の教育を受けた人は、モスクに通うこと自体がその人の知的なレベルの低さを表すとみていた。

私は神も鬼も信じたことはない。ソ連時代もモスクや教会に行く人はいた。しかし、私は当時も今も宗教に関する自分の意見を変えたことはなく、それに頼ることは愚かな行為だと思っている。（証言者No. 30, ロシア人, 男性, アンディジャン）

別の人の証言からも似たような状況が伝わってくる。特に、共産黨員やソビエト政権の無神論に沿った教育を受けた人の中で宗教に対して反感を持った人が少なくなかった。

当時の共産黨員やソビエト教育を受けた人々の宗教心は今と異なっていた。彼らの中で誰かが教会やモスクに行っていることがわかると、差別はしなかったものの区別はされていた。指をさされて批判されることはなかったが、人々の視線は冷たいものだった。

今は信じる人もそうじゃない人も教会に行くが、それでもある程度しっかりした考え方を持っていて、無神論教育を受けていれば教会などには行かないだろう。(証言者No. 11, ウズベク人, 女性, タシケント)

このような人にとっての権威とは、モスクのイマーム(宗教指導者)ではなく、大学の教授や共産党の幹部であった。宗教は恐れるものではなく、自分たちが十分理解することのできない不思議な世界として受け止めていた。

ソ連時代に生まれ育った子どもたちは宗教についても伝統についても大して知識を持っていない。彼らはコーランを読んだこともないし、読もうと思う気持ちすらないんだ。(証言者No. 11, ウズベク人, 女性, タシケント)

多くの人の宗教に対する考え方は、コーランや聖書を読むことで出来上がったというよりも宗教関係者とのやり取りで形成されたという。彼らは尊敬できるイマームや宗教指導者に会うと、宗教に関して良い印象を持ったが、そうでない人と交流すると後ろ向きの考えになった。その一例は、以下の証言である。

私たちの父はあまり宗教を信じなかった。彼は宗教関係者(正教の司祭)のところで運転士を務めていたことがあって、宗教指導者が金曜日にもかかわらず、食事制限もせずにご飯を食べていたことがあったそうだ。その教会

の人が金曜日に私たちの家に来たことがあって、やはり普段通り（キリスト教の制限を守らず）食事をしていたので、母が禁じられているのではないかと尋ねたらしい。そうしたら教会の人が「私もまだ天国に行ったことはないからわれわれの上は何があるかはわからないけれど、人を殺すことや動物虐待することなどは禁じられている。しかしご飯を食べるのは自然なことであり罪ではない」と説明したらしい。

その時から父は宗教関係者を信じなくなり、宗教を真剣に受け止めることができなくなった。（証言者No. 31, ロシア人, 女性, アンディジャン）

共産党員は公式には宗教に対する愛着を表明しなかったが以下の証言のように宗教の役割は認識していたようである。隠れて宗教儀礼を行っていた例も少なくない。このような矛盾する状態がソ連時代のウズベキスタン社会に出来上がった理由はいくつかあるが、宗教がこの地域で歴史的に根付いていたこと、人々の伝統の一部を構成したこと、無神論教育が人々にそれほどの希望を与えることができなかったこと、そして何か良くないことが起きた時には宗教が最後の頼りになったことなどが挙げられる。

共産党員の間でも、年を取ったり、家族や自分に悪いことが起きたりした時には宗教に対する関心が高まった。

母は共産党員だったので、党内でのキャリアに悪影響が出ることを恐れ、教会に行くことを避けていた。私たちが教会に行けなかったために、母の友達がいつも家に来て、私たちの頭の上でお祈りをしてくれた。そのことが共産党にばれると母は党から除名される可能性があったので、宗教的な行事はすべてその友達がしてくれた。（証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド）

家族が健康を害した時は医療に頼りながら、それ以上の力を宗教に求めた。そのような反応は一般的にどの社会でも起こることだが、ソ連時代のウズベキスタンでもそれは最後の希望になっていた。

神様は存在しないという表向きの考え方が固定化していたが、私の中にはいつもアッラーが存在していた。

私は重い病気になり大きな手術を経験したが、それがあつた意味、芯から綺麗になつて、純粹に宗教を信じるようになったきっかけだつた。それから以前にも増して神様を信じている。(証言者No. 15, ウズベク人, 女性, タシケント)

宗教についての考え方は世代別のみならず、民族とも関連していた。一般的に、ソ連時代以降、ウズベク人や中央アジアの主要民族はロシア人やスラブ系民族、少数民族よりも宗教への愛着が強かつた。その要因はいくつか挙げられるが、なかでも歴史的に家族内で宗教的な教育が行われていたこと、宗教儀礼を守つたこと、そしてコミュニティ内における宗教が重要な位置をしめていたことがウズベク人などの宗教観と姿勢を強くした²⁴⁾。

ソビエト政権は宗教全体を否定していたにもかかわらず、ロシア人や少数民族の宗教であるキリスト教よりも国民の大半が信じていたイスラーム教の影響力を恐れていた。そのためソビエト政権のイスラーム教への監視はロシア正教会より厳しかつたと思われる²⁵⁾。

その結果として矛盾することが起きていた。より宗教的であつたウズベク人のモスク通いは制限され監視されていたが、それほど熱心でなかつたロシア人やキリスト教信者の教会訪問は比較的可能だつた。

ソ連時代の政策の中心は無宗教的な社会を作ることだつたが、イスラーム教もキリスト教の人もそれぞれの宗教的な儀礼を行う機会はあつた。共産党の執行部も国民の間に不満が生まれないように、生活の中ではイスラームについて特に厳しい制限を与えなかつた。

しかし、イスラーム教とキリスト教の扱いには大きな差があつたように

24) この点に関しては、ティムール・ダダバエフ『社会主義後のウズベキスタン—変わる国と揺れる人々の心 (アジアを見る眼 110)』, アジア経済研究所, 2008年, 49-75頁参照。

25) この点に関して多くの証言者の意見は一致しており、イスラーム教とキリスト教の回答者ともにこのような意見を持っている。

思う。例えばロシア人がキリスト教の教会に行き、お祈りをすることはある程度自由だったが、私たちがモスクでお祈りをすることを共産党は許さなかった。

当時モスクワにあった教会は機能していて、ロシア人がお祈りをすることは可能だったが、私たちの場合はモスクがほぼ完全に閉まっていたので、礼拝自体が禁じられていた。(証言者No. 45, タジク人, 男性, プハラ州)

このような状況で興味深いのは、無神論を教えていた人の中にロシア人や非ムスリムの人が少なくなかったことである。その一方、ある証言によると、ロシア系住民でそれまで無宗教もしくは正教徒だった人がウズベキスタンの社会でイスラーム教に影響を受けることもあったようである。

私はロシア人で、無神論教育を受けてきたが、宗教を否定してはいなかった。心の中ではもっと宗教心のある人間になりたいという気持ちもあった。

ある時、私と友達はサマルカンドのアル・ブハーリーの墓に行き、そこでお祈りをする人々の部屋に入り、彼らがしていた所作をそのまま真似てみた。そして自分たちが言える言葉でアッラーに祈ると、温かい気持ちになった。それは今までにない新しい感情だった。(証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド)

2.2 ソ連時代の教育と宗教を巡る人々の迷いと混乱

ソ連時代のウズベキスタンにおいて、宗教はある意味では人々にとってもっとも複雑なものであり、それに対する姿勢は決めづらいものであった。上記にもあったように、共産主義のイデオロギーの一環として無宗教だった人もいたが、多くは日常生活では宗教とまではいなくても何か人間以上の力があると信じていた。このような状況の複雑さは教育現場でもっとも顕著であった。それは教育機関が公式に無神論を教えなければならず、その過程での課題が多かったためである。

その一つに、子どもが家で教えられることと学校で教えられる無神論がしば

しばぶつかり合ったことが挙げられる。以下の証言によると、小学校から無神論者を育てるためにあらゆる科目が組まれ、現場の先生も困っていたようだ。

私の家庭では祖父から両親まで全員宗教を信じていたけれど、決していきすぎてはいなかった。父は共産党員だったため、その立場に傷が付かないように母が私たちに宗教の教えを話してくれた。

学校で一度だけ宗教についての授業があった。私はまだ初学年だったので「神様を信じるか？」という質問に、「信じる」と言って手を挙げてしまった。そして親が学校に呼ばれて、(私たち子どもも親も)先生から説教された。私は「なぜ神を信じるのか?」、「お祖父ちゃん、お祖母ちゃんはお祈りをするのか?」といろいろ聞かれた。それで「父がいつも『フド・ホフラサ! (神がお望みならば)』と言っているから」と答えたい。(証言者 No. 3, ウズベク人, 女性, タシケント)

しかも、そのようなことがムスリムの家庭の子どものみならずキリスト教を信じる子どもの中でもしばしば起きていた。政府としては以下のように、モスクや教会に通う子どもを無宗教にするために力を入れていた。

私は子どもの頃、教会に行くのが好きだったが、そこに行くと罰を与えられた。次の日、学校の先生に「教会に行った人は誰?」と聞かれ、大体5、6人が手を挙げていた。そうしたら「あなたたちは放課後に残りなさい」と言われ、1時間叱られてから家に帰された。そんなこともあり、私はあまり宗教に対して愛着を感じないまま育った。

教会はしだいに人が入れないようになって、そこを倉庫として使うことが決まった。最終的に教会は壊されてしまい、その場所は空き地になった。

私の上の娘はいつも神様がいると言い、私と言い合いになることもあるが、残念ながら心の中に「光」を感じないでいる。やはり小さい頃からそのような教育を受けてきたせいだろうか。(証言者 No. 30, ロシア人, 男性, アンディジャン)

ほとんどの若者が学校で無神論などを学ばされたが、マハッラで宗教に関する教育を受けた者も少なくなく、生活の中で自然に宗教観が芽生えていった。彼らの心の中には政府の公式なイデオロギーであった無神論と個人的な宗教観が共存していた。

一言で言うと、当時（筆者注：ソ連時代）の政策は反宗教的だったので、正式な宗教的行事はほとんど行われなかった。しかし、私たちが住んでいたマハッラにはモスクがあった。そのモスクは今もある。断食後のハイト（数日間のお祝いの期間）が始まると、私たちのマハッラの通りは人でいっぱいになった。朝の4時から人々が集まりはじめ、お祈りをしていた。ハイト（の祝祭）は当時ある程度許されていた。特に年寄りハイトローザ（断食）を厳格に守っていた。私の祖母は断食もしたし、一日5回のお祈りもした。私は小さいころからそのようなことを見てきた。私たちは大学で無神論（アテイズム）を勉強したが、家に戻れば祖母と父が私たちにコーランの読み方やお祈りの仕方を教えてくれた。また、例えば親戚が亡くなると、すべての儀式をイスラーム作法に従ってきちんと言った。*（証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント）

お祈りに関しても同じことがあったようだ。子どもたちは特別にお祈りの仕方や行事を教えられなかったとしても、宗教を信じる人が多い環境にいるだけで様々なことを自然に教わったようだ。

当時の政策を思い出すと、学校でもどこでも無宗教主義が強制的に教えられ、（国は）私たちがその方向で育てようとした。

しかし、両親はいつもお祈りをしていて信仰心の厚い人だった。両親は私たちにわざわざお祈りの仕方を教えることはしなかったけれど、彼らのその姿から学んだ。（証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント）

こうしたことはイスラーム教を信じてきた民族のみならず、伝統的にキリスト教を信じてきたウズベキスタン在住のロシア人やスラブ系の人たちにもあっ

た。

私たちは宗教のことを深く考えたことはなく、子どもの頃にオクチャブリャト（小学校共産少年組織）、ピオネール、コムソモールなどを経験した人には無神論教育がしっかり染み込んでいた。だから私たちも信仰心があったわけではない。

親もあまり宗教的でなかったけれど、祖父母には信仰心があった。それで宗教を信じていなかった私たちをキリスト教に入信させる行事（kreshchenie）やパスハ（キリスト教の行事）などをきちんと行おうと努力した。私たちは共産党を信じて行動しているながら、もう一方では、宗教行事を行っていたのだからこれは矛盾していることだった。（証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド）

このような教育の方針と人々の志向が矛盾する中で、学校の教師も非常に複雑な気持ちで「上」から言われたことを教えていたようだ。以下の証言のように、彼らも宗教に関してそれぞれの意見を持っており、日常生活の中で宗教儀礼を行っていた人もいた。しかし、立場上そのような姿勢を明るみにすることは難しく、正しいと思っていなくても無神論を教えていた人も少なくなかった。

私は授業で自分の学生たちに宗教は毒であって、その教えには従わないように言ってきた。実は私自身は、われわれ人間以上に何か大きな存在があると思っていたが、学生からそのような話が出て宗教を否定的に教えてきた。しかし、たまに、何か上からの「光」があって、その「光」はわれわれを必要な時に後押ししたり、止めたりすると話していた。

今、当時の学生たちに会うと、彼らはその話を思い出してくれるが、同時に、私は最先端技術に興味があり、それが社会をもっと発展させてくれればいいという現代的な考え方をしているので、複雑な気持ちもある。

私自身の宗教に関する考え方はこの20年で変わったと自覚している。今では毎日お祈りをするし、夜中に目が覚めると、またお祈りをしている。そして宗教について関心を持ち、いろいろな人の話を聞くようになった。特に

神様（アッラー）に私の子どもたちの健康と幸せをお願いすることが多い。
（証言者No. 8, ウズベク人, 男性, タシケント）

3. ソ連時代の宗教行事

ソ連時代のウズベキスタン社会において、政府が宗教を評価しなかったのに対し、一般国民の大半は自分たちの宗教観を公式に表明しなくても宗教を重視していた。宗教は彼らの日常生活の中にあり、様々な行事を通してその姿を表していた。

3.1 日常生活の中のイスラーム

これまでにもあったように、ソ連時代のウズベキスタンでは日常生活において宗教は重要な意味を持っていた。それが特に重視されたのは出生、結婚、死に至る通過儀礼においてである。共産党や政府もそのような状況には打つ手がなく、みてもぬふりをするしかなかった。

経済的に安定していたとはいえ、人々が気持ちの安定を求める時には、宗教がその心理的な面を満たしていた。そうしたこともあって、政府が経済的な安定をもたらし、不自由のない生活を保障しても、多くの人はやはり宗教を必要としていた。

あらゆる宗教的な行事が禁止されていたにもかかわらず、国民は伝統に従って様々な儀礼を行っていた。例えば、子どもが生まれるとムッラー（イマーム）かオティン（女性の宗教指導者）を呼び、お祈りなどをしてもらっていた。国家機関はそのような儀式を人々がしていることを黙認し、誰も文句を言わなかった。

人々は「フド・ホフラサ」という言葉を日常の中でよく使っていた。私たちの人生は川のように静かに流れ、その流れを止めたり波を起こしたりする者はなかった。（証言者No. 8, ウズベク人, 男性, タシケント）

もう一人の証言からも正式に禁止されていたはずの宗教行事を国民が行って

いたことがわかる。共産党のイデオロギーも日常生活において宗教を完全に禁じることはできなかったようだ。

お祈りをすることは禁じられ、モスクも監視されていたので、私たちは自分の家でお祈りをしていた。(証言者No. 16, ウズベク人, 女性, タシケント)

仮に、政府関係者が人々の宗教的な行事などを禁じようとしても、国民はすでに対策を用意していた。例えば、政府や共産党の関係者が各地の宗教行事や宗教施設を非公式に訪ねてきても、人々は様々な言い訳をして、自分たちの思いを悟られないようにしていた。以下はその一例である。

私たちのマハッラでは長老だった父と友人たちが小さな部屋を作って、その中にお祈りやイスラームの行事に必要な物をすべてそろえていた。

行政の審査官がマハッラ内に来た時、その部屋に鍵をかけようとしたので、部屋はマハッラの単なる倉庫であって、住民の結婚式やお葬式の際に共用で使う椅子や他の消耗品などが入っていると説明した。それで鍵をかけられずにすんだという。(証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

このような事例は、一般国民と政府の間に妥協があったことを示唆している。日常生活における宗教的な行事を限定してはいるが、見逃す代わりに共産党や政府に便利な方針で宗教的な指導をしてもらうこともあったようだ。例えば、経済的に厳しい時期や政治的な安定が必要な時に宗教組織(中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局)は政府を支持し、共産党や政府のもとで団結するよう国民に呼びかけた。第二次世界大戦がその一例である。

宗教はよくない、国民を迷わせるものであるという意見があった。しかし、宗教機関やその関係者が国民や国のために多くの犠牲を払い、多数の人を戦地に動員したこともあった。

宗教関係者は、勝つために兵隊に服や食糧を小包で可能な限り提供し、国

民にもそうするように呼びかけた。宗教指導者に呼びかけをして実行させたのはスターリンであった。(証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

3.2 ソ連時代の宗教行事

ソ連時代における共産党や政府による厳しい宗教政策にもかかわらず、一般国民は日常生活の中でその宗教観を様々な行事を通して表していた。形やきっかけはそれぞれ違うが、共産党や政府の公式な政治方針と対立しないように、宗教的なものというよりはむしろ民族的なもの、各家庭の個人的な行事の形で行っていた。

ソ連時代には宗教的なことは隠れて行われていた。一番大きいモスクのみが機能していて、婚約や結婚する時には、市役所に行ってから非公式にそのモスクに行くのが一般的だった。モスク関係者が当人たちの家や結婚式場に来ることはほとんどなく、私たちが婚約したときもモスクに行った。

結婚式自体も現在と比べると異なっている。例えば、式を挙げる時に女性側が開く披露宴(キズ・オシ)は3日間あり、男性側の披露宴も別に行われた。まず女性側に結婚式に必要な品々を送り、次の日の夜に女性側の結婚式が行われる。そして花嫁をその家から花婿の家に送り出し、その夜に花婿の家で披露宴が行われる。それから2日して今度は花嫁の家に両家の親戚と近所の人を呼んでお祝いのお式をする(バズム)。当時はこれが当たり前で、特に制限はなかった。

しかし、今になってそのような式を最低限に減らそうとする政府の動きがある。現在はお金持ちだと盛大な結婚式を挙げ、そうでないと地味なものになる。あの頃は、皆給料が60ソムくらいで、それだけあれば結婚資金が十分工面できた。今は10万ソム持ってバザールに行っても買い物袋が三つにもならないし、立派な結婚式を挙げることもできない。(証言者No. 23, タジク人, 女性, タシケント)

このように、宗教が日常生活の中でその姿を表すのが結婚の時である。ソ連時代は婚約や結婚に関しては政府機関(ZAGS)で登録するとともに、宗教指

尊者から了承を得るようにしていた。なかにはそうしない人もいたが、役所で
の手続きを完了してから、イマームのところに行き、その教えに従って結婚の
手続きをする人が圧倒的に多かった²⁶⁾。興味深いのは、役所で手続きをしてから
その足で宗教指導者のところに行っていたことである。この一例はソ連時代の
ウズベキスタン国民の生活の中で、宗教と無宗教主義が大きくぶつかり合う
ことがなく、一見矛盾すると思われがちだが、そうすることで政府との対立が
避けられたことを示している。ある意味これも政府と国民の間の妥協策といえ
る。

関連する問題として、1人の男性が複数の妻を持つ一夫多妻がある。政府は、
一夫一妻を定めていたが、それに反して伝統に従う一夫多妻の婚姻関係があっ
た。ソ連時代にはこのようなことは例外的であり、他人に知られないように隠
れて行われていた。この時代のモラルでは、複数の妻を持つことは強く批判さ
れており、政府、共産党や一般の人はそういう状態を受け入れることはなかつ
た。しかし、様々な理由で複数の妻を持つ人もいた。その実態は以下の証言の
ようなものだった。

ソ連時代になっても一夫多妻は続いていて、私たちのマハッラにも2人
の妻を持つ人がいる。私はいつも彼の家を観察するようにしながら、その家
の前を通っていた。

1人目の妻は端の部屋で、2人目はその反対側に住んでいた。料理を作る
鍋などは別々にしていたけれど、同じ家に住んでいた。彼は、両方の妻のと
ころに交互に泊まっていたようだった。子どもも大勢いて仲良く遊んでい
た。妻たちの関係も良くてまったく問題はなかった。彼には2人の妻に必
要な物を提供できるだけの余裕があったようだ。(証言者No. 9, ウズベク
人, 男性, タシケント)

別の証言によると、複数の妻を持つ理由は田舎に男性が少ないことから、女

26) そのような宗教的な儀式を禁じ、非宗教的な儀式のみを強調したガイドラインまでが作成されて
いた。例えば、*Sotsialisticheskie obriady v zhizni'*, Tashkent : Uzbekistan, 1987 参照。

性が結婚して子どもを産むためには同じ村の妻子持ちの男性と結婚するよりほかに方法がないからであった。そういう女性は法律に決められた形では妻子持ちの男性と結婚できないため、一夫多妻が許される宗教の教えに従う形で結婚していた。彼女たちにとって宗教は、政府や国民に一般的には許されていない結婚を可能にし、何らかの形で承認することのできる唯一の方法だった。

私は6年間トバラクというスルハンダリヤ州で働いていた。その住民の多くはタジク人だった。彼らの中には確かに複数の妻を持つ人がいて、私はその時初めて多妻という概念に直面した。

しかし、彼らの場合は本当に仕方がないことだったと思う。その地区に男性がそれほどいなくて、女性が非常に多かった。結婚もしたいし、子どもも産みたいという女性は宗教理念に従って妻のいる男と結婚するしかなかったからだ。(証言者No. 39, ウズベク人, 男性, フェルガナ州)

また、結婚以上に葬儀には宗教的な儀式が重視され、特にムスリムの間ではそれが人生においてもっとも重要な儀式の一つと考えられてきた。人々の日常会話の中でよく聞かれるのは、知り合いの結婚式に行けなくても葬儀に出席するのは義務であるという話だ。そうしたことから葬儀関連の様々な行事に参加する人は多く、ソ連時代においても葬儀への出席は重要なことであった。それだけにソ連時代の宗教の制限の中では、葬儀に関するものが特にウズベキスタン国民の反感を買った。

この時代の政策は宗教を撲滅することをめざし、関連行事は行わないように働きかけられていた。例えば、私たちウズベク人の場合、誰かが亡くなると、その家の玄関先に男たちが1日中立つことになる。それは亡くなった人のためにお祈りをしようと訪れた人たちを出迎える役割を果たす。

しかし、ソ連時代にはこのような行事は禁じられていたので隠れて行っていた。特に共産党員の家では誰かが亡くなったとしても宗教行事は一切禁止されていた。(証言者No. 26, タタール人, 女性, ナマンガン)

こうした行事を維持する上で年寄りの役割は重要であった。年寄りには単に行事に参加するだけでなく、若者に対して伝統的な教育をし、その意義と方法を教えていた。そして、彼らはそれぞれの行事について説明し、機会を見つけては自分たちの姿を若者にみせるようにしていた。

それをみて育った若者は、共産主義時代の教育の影響でそれほど行事に参加していなくても、ムスリムという認識が強く、年寄りによって守られた行事は彼らのムスリムというアイデンティティの基盤となっていた。

ソ連時代は年寄りがよく断食をしたが、われわれは若かったのでしなかった。今になって私も断食するようになったけれど、それにはいくつかの理由がある。一つは、私たちはムスリムだから、それが意味では私たちの教えであること。

それとやはりどこに行っても断食している人がいる中で、自分だけがしないのは目立ってしまうし、いけないことだと思うからだ。他の人と比べて、自分の宗教に対する不真面目な姿勢が恥ずかしくならないように、今ではしっかり守っている。(証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント)

このようなイスラームの行事が行われることが一般的だった中で、それ以外の宗教行事も日常の中でみられた。例えば、キリスト教の行事はイスラーム以上に行いやすく、それをやめさせようとする人はいなかった。

クリスマスのような宗教的な行事はあまりなかったけれど、お葬式とパスハという行事のことはよく覚えている。

祖母が亡くなったとき私はまだ小さかったが、祖母の冥福を祈るために人々がわが家に来ていた。私たちの家では宗教的な行事はそれほど行わなかったが、キリスト教への入信(クレシェニエ)などは自由だった。私の兄も自分の子どもを教会に連れて行ってその儀式をしてもらった。(証言者No. 30, ロシア人, 男性, アンディジャン)

ま と め

ソ連時代に実施された多くの政策の中で、宗教政策は一般国民からもっとも受け入れ難いものであった。本章でみてきたように、ウズベキスタン国民の多くはムスリムであり、彼らは宗教に対して非常に強い愛着を感じていた。しかし、ソ連時代の政策として脱宗教化が訴えられ、様々な機会において宗教批判が繰り返された。そして、多くの宗教機関が閉鎖され、その建物が倉庫に使われたり、壊されたりした。

その政策を受け入れ、宗教から離れていった人もいたが、大半の国民はそれに対して様々な手段で抵抗した。その抵抗は直接的なものではなく、宗教行事を民族的な行事に見せかけ守っていくことであった。共産党もそのような宗教的な愛着の強さを認識し、一般国民に対してそれほど強固な対応を取らないようにした。宗教行事への参加がもっとも厳しく制限されたのは共産党員や指導部の人であったが、彼らでさえ、管理から逃れて密かに宗教行事に参加していた。そのことから、ソ連時代の宗教政策は一般国民にそれほど受け入れられず、多くの証言者によると、そのような政策がソ連時代の生活の中で一番の不満であったという。